

# 八幡山遺跡発掘調査報告書

——平成5年度範囲確認調査——

1994

新津市教育委員会

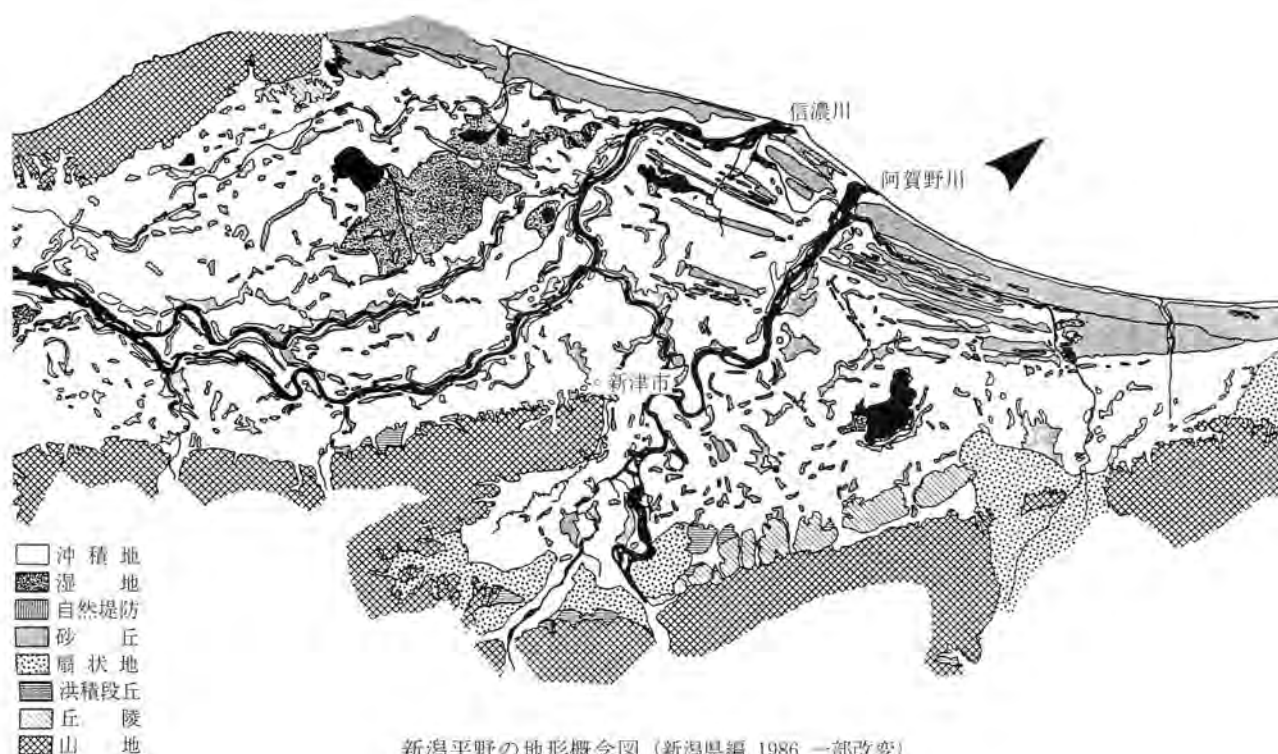
# 例 言

1. 本書は新潟県新津市大字古津字八幡腰715他に所在する八幡山遺跡<sup>（はちまんやま）</sup>の発掘調査報告書である。
2. 調査は国庫補助金・県費補助金を受けて、新潟県教育庁文化行政課の指導のもとに新津市教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 注記は「八」とし、他に調査区・遺構名・層序・日付等を記した。
4. 調査により出土した遺物や作成した図面・写真などは新津市教育委員会が一括して保管している。
5. 調査および本書の作業員の協力を得て渡邊が行った。

## 6. 調査体制

調査主体	新津市教育委員会（教育長 川瀬敏夫）
調査指導	井上和人（文化庁記念物課文化財調査官） 坂井秀弥（ <span style="display: inline-block; width: 1em; height: 1em; border: 1px solid black; border-radius: 50%;"></span> ） 小林達雄（國學院大學文学部教授） 戸根与八郎（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長） 高橋 保（ <span style="display: inline-block; width: 1em; height: 1em; border: 1px solid black; border-radius: 50%;"></span> 主任）
調査担当	渡邊朋和（生涯学習課主事）
事務局	榎本泰伸（生涯学習課長）・吉沢 功（同課長補佐）・上沼 茂（同係長）・小島静子（同主査） 川崎昌晃（同主事）・阿達哲二（同技士）
作業員	地元の方々

7. 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より御指導・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼を申し上げる。  
甘粕 健・石川日出志・小川三夫・川上貞雄・川村浩司・品田高志・田中耕作・田中 靖・前山精明  
助新潟県埋蔵文化財調査事業団



新潟平野の地形概念図（新潟県編 1986 一部改変）

# 目 次

I	発掘調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と環境	2
1	地理的環境	2
2	周辺の遺跡と歴史的環境	4
III	平成5年度の調査の概要	6
1	発掘調査の方法	6
2	基本層序	6
3	調査の経過	6
IV	遺構と出土遺物	8
1	遺 構	8
2	遺 物	9
V	ま と め	12
1	第1次調査から第8次調査の成果	12
2	第9次調査の成果と問題点	13
	引用・参考文献	14

# 挿 図 目 次

第1図	八幡山遺跡全体図	3
第2図	八幡山遺跡と周辺の遺跡	5
第3図	トレンチ位置図	7
第4図	遺構全体図1	(折込み8-9)
第5図	遺構全体図2	(折込み8-9)
第6図	弥生土器	10

# 表 目 次

第1表	八幡山遺跡調査経緯	1
第2表	弥生土器観察表	11

# 写真図版目次

図版1	G8・G11・G12 環濠土層断面 (カラー)	図版5	G8・G9 遺構・土層断面
図版2	空中写真	図版6	G8 遺構・土層断面
図版3	遺跡近景・発掘調査風景・G12 遺構・土層断面	図版7	F9・F10・F12・F13
図版4	G10・G11・G12 遺構・土層断面	図版8	出土遺物

# I 発掘調査に至る経緯

昭和62年、新津市の金津地区、大字古津・浦ヶ沢・金津に広がる通称金津丘陵で土取りが計画された。それは磐越自動車道建設に伴う盛土として土砂を掘削し、その跡地に新津市が総合運動公園を建設するというものであった。開発面積は約45 haである。金津丘陵には昭和47年から48年の柿田地造成中に製鉄遺跡が初めて発見され、昭和60年の新潟県教育庁文化行政課による詳細分布調査によって、さらに別地点が周知化されていた。このように開発区域内に既に周知化された遺跡が存在したこともあり、この開発を契機として確認調査が行われることになった(第1図・第1表)。

昭和62年に、新津市教育委員会が調査主体となり新潟県教育庁文化行政課職員の担当により実施された八幡山城跡周辺の確認調査(第1次)で、城跡とされていた遺構が、城跡ではなく県内最大規模の大形円墳であることが明らかとなり、後に古津八幡山古墳と命名された。盛土の下から所謂天王山式期頃の遺物包含層と竪穴住居址が確認され、さらに丘陵上に設定した数か所のトレンチから弥生土器が出土するにおよんで、弥生時代の遺跡として初めて認識されることとなった。報告者は「丘陵尾根上に立地することから、一般的な農村ではなく、特殊な性格をもつものと考えられる。」と記しており、高地性集落との明言を避けながらも、その特殊性を指摘している点は重要である。これをうけて、新津市教育委員会は昭和63年3月8日付で文化庁長官宛、新遺跡として「八幡山遺跡」の発見通知を行った。

同年6月から、市教育委員会は古墳の南東部に広がる北東斜面の確認調査を大規模に実施した(第3次)。竪穴住居址16基・前方後方形の墳墓1基・炉址3基などと共に、それらを取り囲む環濠が4か所で確認され、少なくとも二重に環濠が巡る高地性集落であることが判明し、日本海側で最北に位置する高地性環濠集落として全国的に注目を集めた。保存の要望が多方面から寄せられ、保存か開発かで問題となった。当初、南側の幅約20mの痩せ尾根を断ち切る形で環濠が検出されたため、この環濠が遺跡の南限界ととらえていた。ところが、同年11月の確認調査(第5次)、翌平成2年の発掘調査(第6次)・確認調査(第7次)により、痩せ尾根の南東に続く尾根上からも竪穴住居址や環濠が確認されたため、この部分を八幡山遺跡南地区として区別することとした。

平成2年度の南地区の確認調査(第7次)では、環濠1条・竪穴住居址8基が検出された。環濠は、尾根の中央部付近にあり、断面は底面の狭い逆梯形を呈する。両端が切れていたが、北側・南側ともに浅い谷が入り込むため、尾根を東西に分断するには十分な機能を有していたものと考えられる。竪穴住居址は、南地区の北西端、痩せ尾根部分にある環濠の南側で3基、南東端の東斜面で5基が検出された。この確認調査の結果、最終的に八幡山遺跡の主要部分を含む19.7 haが現状保存されることが決まった。やむなく記録保存と決まった9,000㎡について、次年度に発掘調査を行うことになった。

平成3年度の発掘調査(第8次)は、南地区の南東端の一部であり、頂部付近から南東斜面にあたる。検出された遺構は、弥生時代の竪穴住居址4基(1基は第7次調査で確認したもの)・時代不明の焼土坑27基である。竪穴住居址は、いずれも頂部からわ

第1表 八幡山遺跡発掘調査経緯

	調査年度	調査区	おもな成果	調査面積
1次	1987(S62) 9.28~10.9	北地区	市教委による確認調査(担当 県文化行政課戸根) 八幡山城跡-古墳の可能性を指摘 盛土下から竪穴住居址検出 八幡山遺跡の発見	502㎡
2次	1987(S62) 11.24~12.8	北地区	市教委による確認調査(担当 川上)	77㎡
	1988(S63) 3.8		八幡山遺跡発見通知を文化庁長官に提出	
3次	1988(S63) 6.23~9.16	北地区	市教委による確認調査(担当 川上) 環濠・住居址・前方後方形・墳墓等の検出	3,317㎡
4次	1988(S63) 9.21~10.3	南地区	市教委による確認調査(担当 川上・荒木) 遺物出土、遺跡範囲拡大「狼煙台」とされる焼土坑の検出	207㎡
5次	1988(S63) 11.9~11.18	南地区	市教委による確認調査(担当 伊与部) 竪穴住居址の検出	156㎡
6次	1990(H2) 5.26~7.9	南地区 (記録保存)	市教委による発掘調査(担当 川上)	6,500㎡
7次	1990(H2) 7.23~8.10	南地区 南西地区	県文化行政課・市教委による確認調査(担当 渡邊) 南地区で環濠・住居址等の検出 遺跡の範囲拡大	13,180㎡ (第6次調査分含む)
8次	1991(H3) 5.20~10.31	南地区 (記録保存)	市教委による発掘調査(担当 渡邊) 住居址・焼土坑等の検出	9,000㎡
	1991(H3) 6.25~8.31	北地区	古津八幡山古墳の測量調査 (古津八幡山古墳調査団 代表新潟大学人文学部甘健教授) 墳丘長約60mの二段構築の造り出し付円墳と推定される	
9次	1993(H5) 9.21~11.5	北地区	市教委による確認調査(担当 渡邊) 環濠が古墳の東側・北東斜面に100m以上延びることを確認	372㎡

ずかに下った標高50～53m付近の北東斜面で検出された。浅い谷を挟んだ北側からも、第7次調査で竪穴住居址が4基確認されており、風による影響を避けて選地されたものと思われる。南地区は尾根上に平坦部分があるにもかかわらず、季節風を避けるように斜面上に住居址が作られていた。遺構数や遺物量なども少なく、第3次調査を実施した北地区があくまでも集落の中心であったものと思われる。

以上のような経緯・状況のなか、現状保存が決定した範囲の整備を行い、将来的には史跡公園として有効活用していくことになった。部分的には平成3年度から建設課主導のもとで始まった「花と遺跡のふるさと公園整備事業」で整備が企図されているが、現状では環濠のつながりや遺跡の範囲といった根本的なことについても不明な点が多く、少なからず問題を残した整備であることは否めない。市教育委員会としては、遺跡の性格をより一層明らかにすることが先決であると考え、平成3年8月には新潟大学人文学部考古学研究室甘粕健教授に依頼し、古津八幡山古墳の測量調査を実施した。その後、本遺跡を最も良く特徴づける環濠の位置を確認し、しかる後に、遺跡の範囲や集落廃絶後に造られた古津八幡山古墳の実体を詳びらかにする年次計画を立てた。当初は平成4年度から実施する予定であったが、緊急調査に追われ、実施できなかった。ようやく平成5年9月になり確認調査を実施する運びとなった。調査期間は平成5年9月21日～11月5日。調査面積は約372m<sup>2</sup>である。

## Ⅱ 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

八幡山遺跡は新潟県新津市大字古津字八幡腰・戸畑・鳥打場・初越ほかに所在する。新潟平野の東縁、信濃川の右岸に沿って延びる丘陵上に位置し、標高54.5m、沖積地との比高差は50m程を測る。

新津市は新潟県のほぼ中央、新津丘陵の北端に位置し、市域の大半は平坦な沖積平野と起伏の小さな丘陵とからなっている。市域の西を信濃川、東を阿賀野川が流れる。北は両河川が最も近接した位置に、両河川をつないで流れる小阿賀野川を挟んで、県都新潟市と境を接している。現在、日本海までは直線距離で約20kmの位置にある。

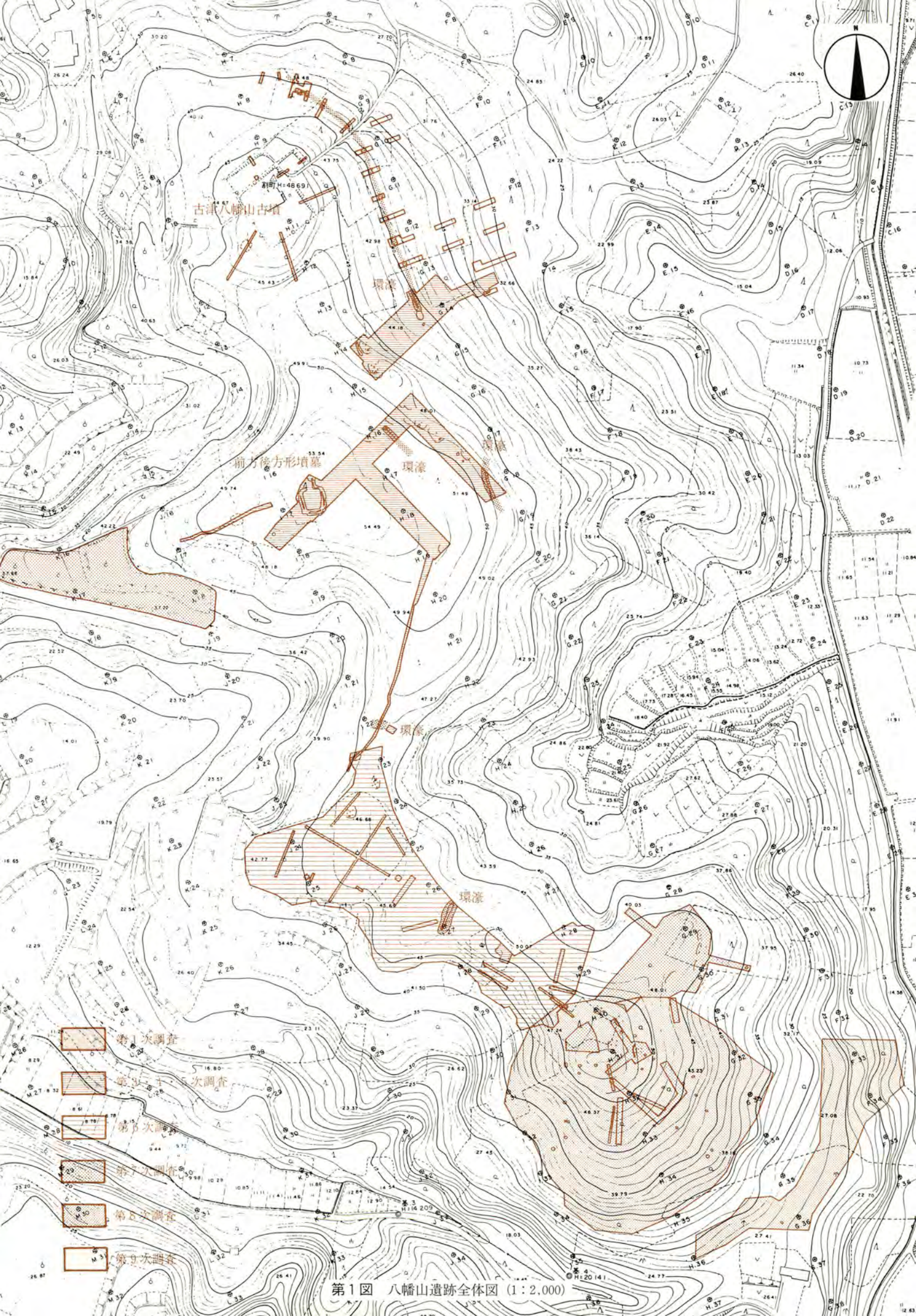
新津丘陵は南南西から北北東に延びる丘陵の北端部、加茂川以北にあたる。標高300m以下の起伏の小さな山地・丘陵で、菩提寺山以南では標高200～280mと比較的高い。その以北では高度を下げ、北端の秋葉山付近では70～80mとなり沖積面に没する。台地は新津丘陵縁辺に小規模に分布し、低地には自然堤防などの微高地が複雑に発達する。これは最終氷期後期以降の海水準変動と信濃川・阿賀野川・能代川などが頻繁に氾濫を繰り返した状況を示している。

八幡山遺跡は、新津丘陵の北西端に位置し、樹枝状に延びた支丘陵のうち、大略北北西に延びた通称金津丘陵の北半部に立地する。遺跡のある支丘陵は標高54.5mを頂部とし、北北西、西、東、南に尾根が続く。北北西に延びた尾根は穏やかに下降し、その先端付近には古津八幡山古墳が築かれている。さらにその先は北西にやや向きを変え、穏やかに高度を下げる。この尾根の西側は急な斜面となっている。この北北西方向の尾根と東方向の尾根の間には北東向きの緩斜面が200m四方程の範囲に広がり、ここが本遺跡の集落の中心をなしていることが、第3次調査で明らかになっている。

南方向の尾根は、幅20m、長さ70m程の痩せ尾根を経て、北西から南東方向に延びた幅40～45m、長さ200mの尾根へと連なっている。この尾根は中央部付近から東側にかけて確かに僅かに高度を上げ、南東端の標高53mを頂部とした後、北東に向きを変え、高度を下げながら70m程で緩斜面となっている。竪穴住居址は、頂部からわずかに下がった標高50～53m付近の北東斜面で検出された。

本遺跡の西には信濃川によって形成された新潟平野が眼下に広がり、遠く弥彦山・角田山を臨むことができる。信濃川左岸にある緒立八幡神社古墳・菖蒲塚古墳・山谷古墳・稲場塚古墳などの前期古墳や大沢遺跡・山谷古墳下層遺跡などの高地性集落と対峙する位置にある。





古津八幡山古墳

前方後方形墳墓

環濠

環濠

環濠

第一次調査

第二次調査

第三次調査

第四次調査

第五次調査

第六次調査

第七次調査

第八次調査

第九次調査

第1図 八幡山遺跡全体図 (1:2,000)



## 2 周辺の遺跡と歴史的環境

市内では現在75か所の遺跡が確認されている。旧石器・縄文・弥生時代と古代・中世の生産遺跡は丘陵上や丘陵裾部に立地し、古代・中世の集落遺跡は沖積平野の微高地に立地する。近年の調査で、古墳時代中期には丘陵縁辺や沖積平野に遺跡が出現し、7世紀後半頃になると、沖積平野上の微高地に大規模な集落が営まれることが明らかになってきた。

**旧石器時代の遺跡** 八幡山遺跡(50)第3次調査や草水町2丁目窯跡(65)の調査でナイフ形石器・石刃などが散発的に出土しているが、市内ではほかに旧石器時代の遺跡としての登録はない。丘陵上や丘陵裾部に立地する。

**縄文時代の遺跡** 市内で15遺跡程知られており、標高10～30m程の丘陵上・丘陵裾部や台地上で、平野部からさほど離れない場所に立地する遺跡が多い。発掘調査された遺跡としては平遺跡(5)しかなく、遺跡の詳細は明らかでない。採集資料による限りでは、縄文時代中期あるいは中期から後期にわたる遺跡が多く、後期前葉の遺物を出土する遺跡が特に多い。なかでも原遺跡(3)は、市内最大規模の縄文遺跡として注目されている。

**弥生時代の遺跡** 八幡山遺跡(50)と隣接する埋葬地遺跡(7)があり、いずれも弥生時代後期の遺跡である。居村C遺跡(D・E地点)(53)でも散発的に同時期の土器片が出土しており、八幡山遺跡との関連が強いものと考えられる。舟戸遺跡(9)でも弥生土器の出土が報じられているが、現状では確認できない。今のところ、市内で確実に弥生時代と言える遺跡は、標高25～50m程の丘陵上に位置する遺跡だけで、平野部に立地する遺跡は知られていない。

**古墳時代の遺跡** 古津八幡山古墳(16)のほかに、近接して舟戸遺跡(9)・高矢C遺跡(12)がある。両遺跡とも丘陵縁辺や台地の端部に立地し、古墳時代中期頃の土師器が出土している。舟戸遺跡では平成5年10・11月の調査で古墳時代中期頃の竪穴住居址が数基検出されており、古津八幡山古墳との関係が注目される遺跡である。また、沖積平野に立地する沖ノ羽遺跡(26)・上浦遺跡(30)では古代の生活面の下から古墳時代中期の土師器が出土しており、当時、既に平野部にも進出しつつあった状況が窺われる。結遺跡(20)からは内面に黒色処理を施した高杯などが出土している。

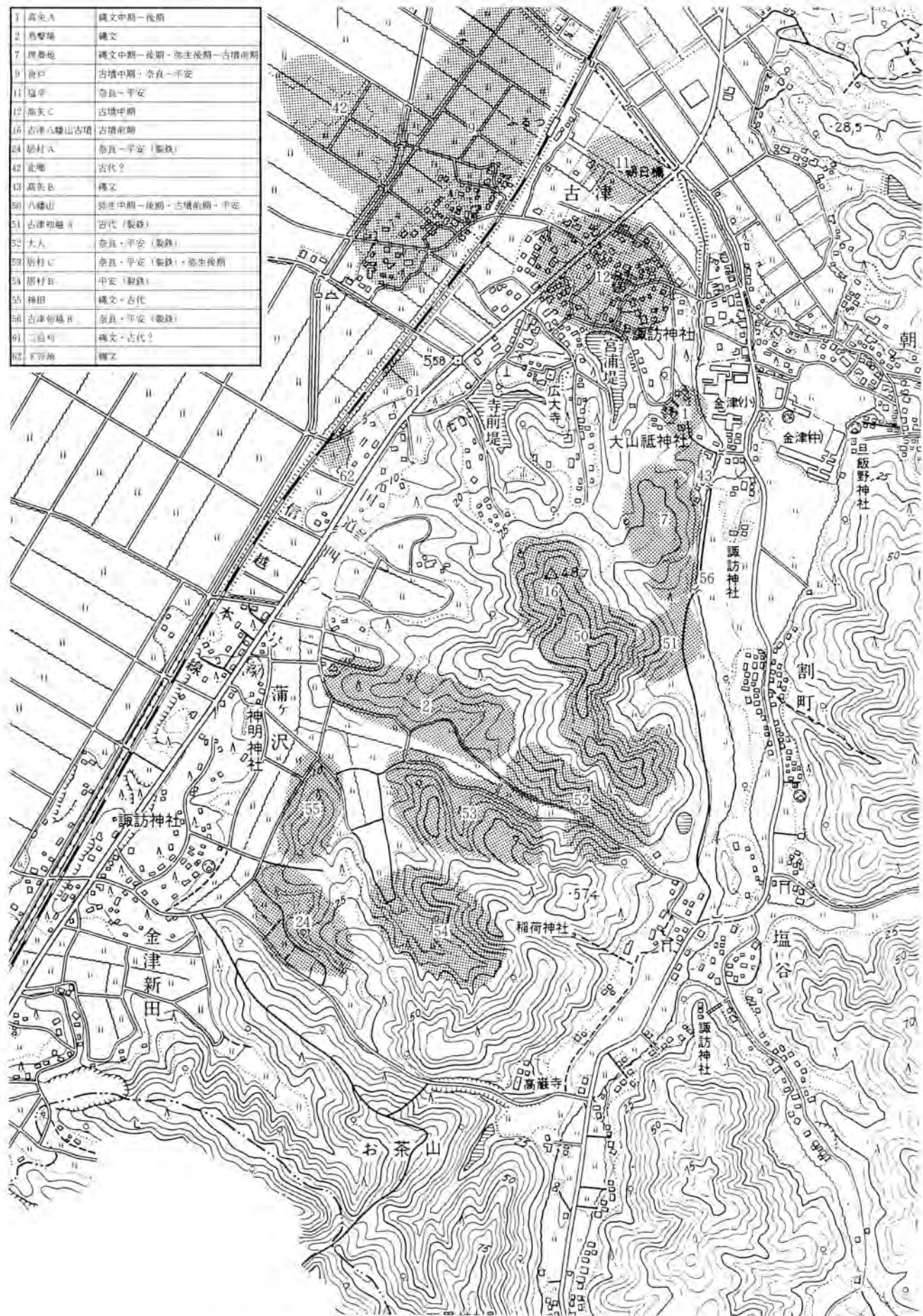
**古代の遺跡** 奈良・平安時代の遺跡には、おもに平野部に立地する集落遺跡と丘陵裾部に立地する製鉄遺跡、須恵器・土師器窯跡等の生産遺跡がある。

磐越自動車道建設に伴い、平成2年から4年にかけて新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団が上浦遺跡(30)・沖ノ羽遺跡(26)などの5遺跡の調査を行ったことをきっかけとして、新津市の平野部には予想以上に遺跡が存在することが明らかになった。平成4年度に工業団地予定地の上浦遺跡(30)の発掘調査では9世紀後半頃の大形掘立柱建物跡などの遺構や三彩小壺が発見されている。また、上浦遺跡の近くにある長沼遺跡(33)からは部分的な調査ではあるが7世紀後半から平安時代遺物が出土しており、隣接する結遺跡も含め注目される一帯である。沖積平野に立地する遺跡は現地表下100～150cm程の深さに包含層があるため、その所在がわからなかったり、範囲が不明確であることが多く、遺跡の周知化に問題を残している。

丘陵裾部の生産遺跡としては、北東側斜面には、須恵器・土師器窯跡が分布し、七本松窯跡(13)から山崎窯跡(五泉市No.12)にかけて数か所の窯跡の存在が明らかにされており、新津丘陵窯跡群と呼称されている。草水町2丁目跡(65)では平成5年度の調査によって、須恵器窯1基・土師器窯10数基・粘土採掘坑や掘立柱建物跡などが検出されている。蒲原郡のみならず、沼垂郡に属する遺跡からも新津丘陵産の須恵器が相当量出土しており、新津丘陵における須恵器生産がかなり大規模に行われていたことを窺わせる。新津丘陵窯跡群における須恵器生産は8世紀前半から9世紀中頃が主体で、長沼遺跡出土資料などを勘案すると7世紀後半まで遡る可能性があると考えられている。一方、丘陵北西側の金津地区では平成元年から3年度にかけて行った発掘調査により、7遺跡9地点以上から製錬炉(箱形炉・壺形炉)と多数の木炭窯が検出され、製鉄遺跡群が存在することが明らかになった(金津丘陵製鉄遺跡群)。わずかな共伴遺物と炉形態や木炭窯の形態・構造などからみて8世紀から10世紀頃にかけての遺跡と考えられる。

**中世の遺跡** 平野部の微高地に立地する集落跡・城陵裾部に立地する山城・製鉄関連遺跡がある。自然堤防上の遺跡は現在の居住域と重なるためか、実体が今一つ明らかではない。

1	高台A	縄文中期-後期
2	高台場	縄文
7	埋蔵地	縄文中期-後期・弥生後期-古墳前期
11	唐戸	古墳中期・奈良-平安
11	塩辛	奈良-平安
12	高台C	古墳中期
16	古津八幡山古墳	古墳前期
24	跡村A	奈良-平安(製鉄)
42	北地	古代?
43	高台B	縄文
50	八幡山	弥生中期-後期・古墳前期・平安
51	古津初畑A	古代(製鉄)
52	大入	奈良・平安(製鉄)
53	跡村C	奈良・平安(製鉄)・弥生後期
54	跡村B	平安(製鉄)
55	神田	縄文・古代
56	古津初畑B	奈良・平安(製鉄)
61	二白河	縄文・古代?
62	高野池	縄文



第2図 八幡山遺跡と周辺の遺跡 (新津市 1986 1:10,000)



## Ⅲ 平成5年度の調査の概要

### 1 発掘調査の方法

遺跡の現況 Ⅱ章で記述したように、八幡山遺跡は新潟平野を臨む丘陵上に立地する。遺跡内は大半が鬱蒼とした山林となっていたが、昭和63年度からの確認調査で主要部分は伐採され、部分的に公園整備が行われている。今回の調査地点は遺跡の北端付近に当たり、荒蕪地ならびに杉林である。荒蕪地は、クマザサ・カヤが繁茂する。地表面には畝状の溝が僅かながら認められ、かつては畑として利用されていたことがわかる。

グリッドの設定(第1図) グリッドを設定するにあたっては、開発計画段階の測量調査によって打設された杭を基準として用いた。これは、当初の開発予定区域45 ha全体に東西50m、南北20m間隔で設定されたもので、金津丘陵の南半部の遺跡の発掘調査で既に用いられていたグリッド名称に合わせたためである。この杭には、古津八幡山古墳にある四等三角点「割町」を基準とし、東西ラインの東から西へアルファベット、南北ラインの北から南へ数字とし、三角点上はH10の記号が付されている。グリッドの南北ラインは国土地理院設定の座標軸に対し、約21度29分西偏する。この50×20mを大グリッドとし、北面した場合に北東にある杭の名称をグリッド名とした。大グリッドをさらに10m方眼の中グリッドに分割し北東隅を1、南西隅を10とし、「G12-6」のように表示した。遺物の取り上げの場合には10mグリッドでは広すぎるために、10mグリッドをさらに2m方眼の小グリッドとし、北西隅を1、南西隅を21、南東隅を25とし、「G12-6-11」のように表示した。

調査の方法 平成5年度の調査(第9次)では、第3次調査時にG13-6・7グリッド付近で検出された環濠が、その先、北側へどのように延びていくのかということを目的一つとして発掘調査を行った。また、時間が許せば、この範囲内で竪穴住居址等の遺構や遺物の広がり把握をよう努めた。発掘には2m幅のトレンチを基準に南側から順に、環濠を追うように設定していった。G9グリッド以北では杉などの樹木のため1m幅のトレンチとし、必要があれば拡張することにした。

掘削はすべて人力で行い、調査後は、遺跡保護のために川砂で5~10cm程度覆ってから排土で埋め戻しを行った。埋め戻しは、小形のバックホウと人力を併用した。

### 2 基本層序

遺跡全体の層序を単純に示せば、下記のとおりとなる。

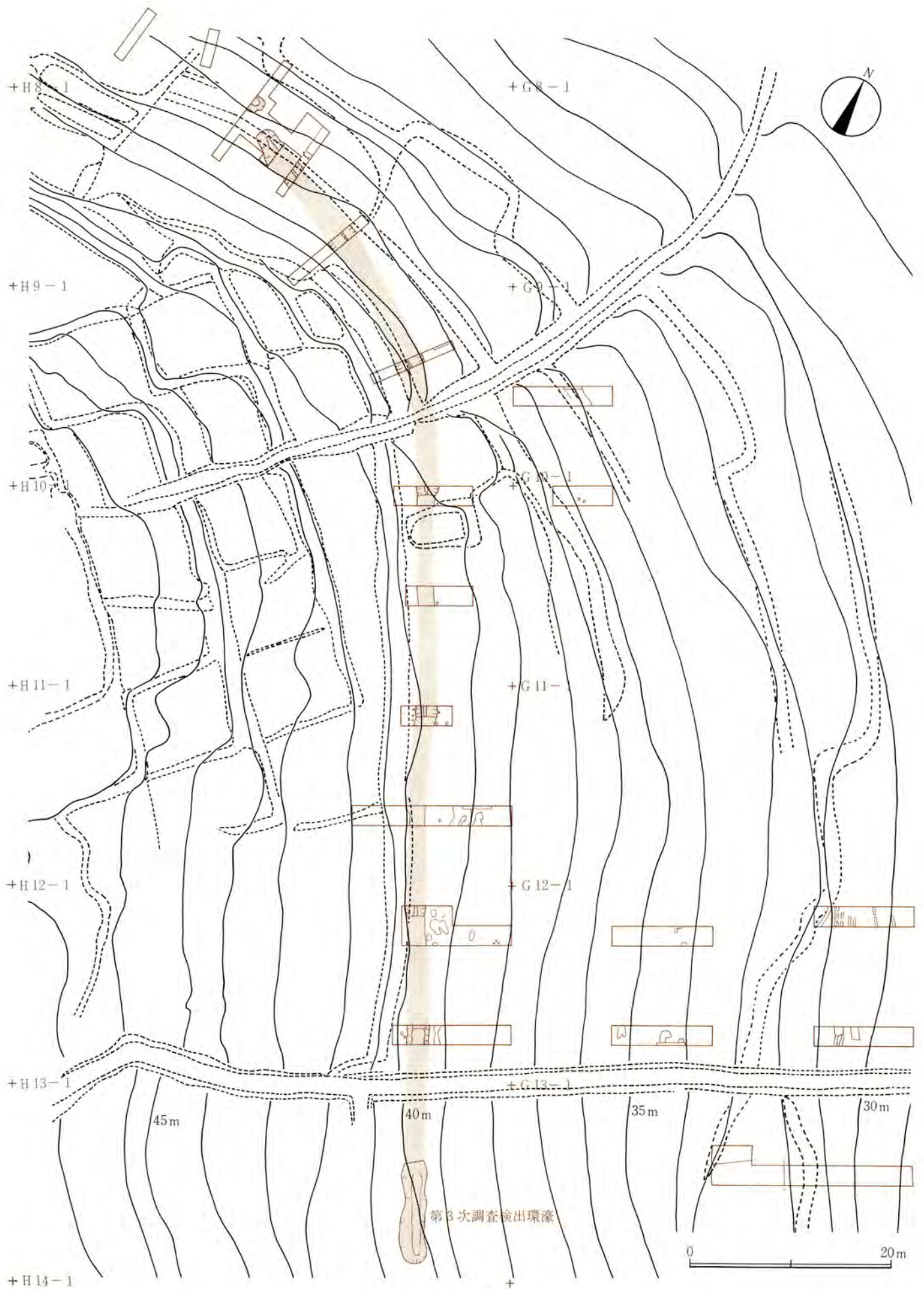
- I層 暗褐色土(表土・耕作土)
- II層 黒褐色土(遺物包含層)
- III層 明黄褐色土・明黄褐色砂質土(地山)

遺跡全体の各所に畑や植林による段切りが造成され、遺物包含層が存在しない部分が見られる。また逆に、段切りによって厚く土が盛られた部分もある。今回の調査区では、段切り部分などに僅かに遺物包含層が認められたにすぎず、全般に包含層の残りは悪かった。特にF9・10・12グリッドでは包含層が存在せず、地山に畝状の溝の痕跡が残されている場所も見られた。

### 3 調査の経過

9月21日(火)~24日(金) 調査予定地点には、クマザサ・カヤなどが生い茂っているためそれらの草刈りを行う。桐等の雑木も伐採する。

27日(月) 基準となる杭打ちを業者に委託する。G12-1・2、G12-6・7グリッドに幅2mのトレンチを設定。作業員により表土剥ぎを始める。予想に反して攪乱が多く、遺物の出土は少ない。



第3図 トレンチ位置図

28日(火)・29日(水) G12-6・7グリッドで遺構確認作業をし、確認状況の写真撮影を行う。トレンチ西側で環濠らしい跡が見つかる。G12-1・2グリッドでもトレンチの西端で環濠らしい痕跡を発見。環濠のある小グリッド3マス分を北へ2m拡張する。地山の明黄褐色土まで下げると、環濠の跡は明瞭に確認することができる。

10月1日(金)～5日(火) G11-6・7、G11-1・2、G10-6・7、G10-1・2の各トレンチで遺構確認作業の結果、環濠を検出する。G12-6・7、G12-1・2グリッドでは環濠の掘り下げがほぼ終了し、土層写真撮影後、土層図の作成にかかる。F9からF12グリッドにかけての草刈り作業を追加する。

6日(水) F12-9、F10-5、F9-10グリッドでトレンチの掘削を始める。

12日(火) 道路北側のG9-1・2、G8-7・8、G8-2・3グリッドにトレンチを3か所設定し、掘削に入る。G9-1・2、G8-7・8グリッドでは遺構確認作業により環濠が検出されたため、直ぐに掘り下げにかかる。

14日(木) G8-3グリッドにトレンチを1本追加する。F12-7グリッドのトレンチを掘り始める。G9-1・2、G8-7・8グリッドで完掘、写真撮影を行う。

18日(月)・19日(火) 文化庁記念物課井上和人文化財調査官・新潟県教育庁文化行政課戸根与八郎埋蔵文化財係長に調査指導のため来跡願う。

20日(水)～22日(木) G8-2・3グリッドで当初設定したトレンチには環濠が検出されず拡張した結果、ようやく環濠が検出される。G8-3グリッドに追加したトレンチでは浅い窪みのようなものが確認されたが、環濠とは考え難く、雑木を避けて両トレンチ間にさらにトレンチを設定する。F13-2・3、G7-9グリッドでトレンチ設定、掘削を始める。

23日(土) 國學院大學文学部小林達雄教授に調査指導のために来跡願う。

27日(月)・28日(火) 埋め戻し用の川砂搬入。G8-2・3、G8-3グリッドのトレンチ間を拡張した結果、環濠の末端と考えられる部分を確認する。写真・実測作業が終了したトレンチから埋め戻しに入る。

29日(水) 掘り下げを完了し、写真撮影、実測作業を行う。

11月1日(月)～5日(金) 埋め戻し、実測作業。5日で埋め戻し作業が終了し、器材の撤収を行う。

## IV 遺構と出土遺物

### 1 遺 構

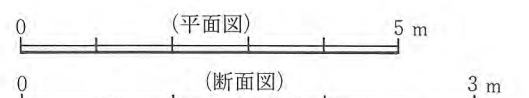
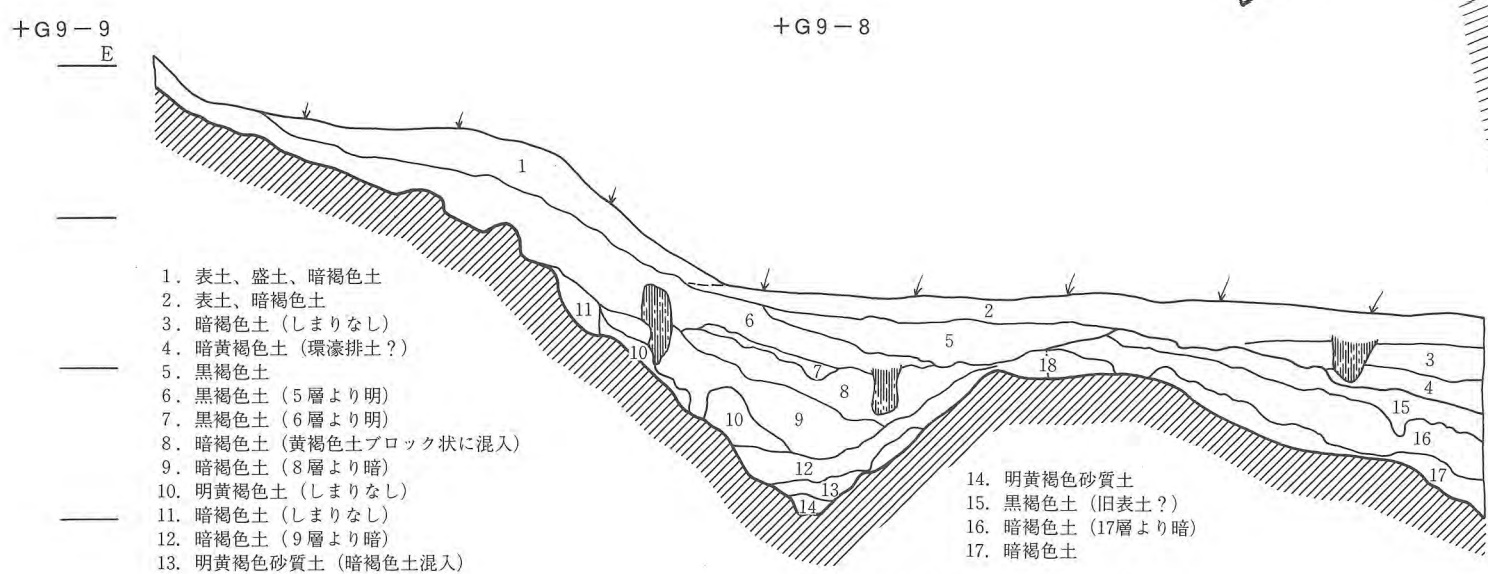
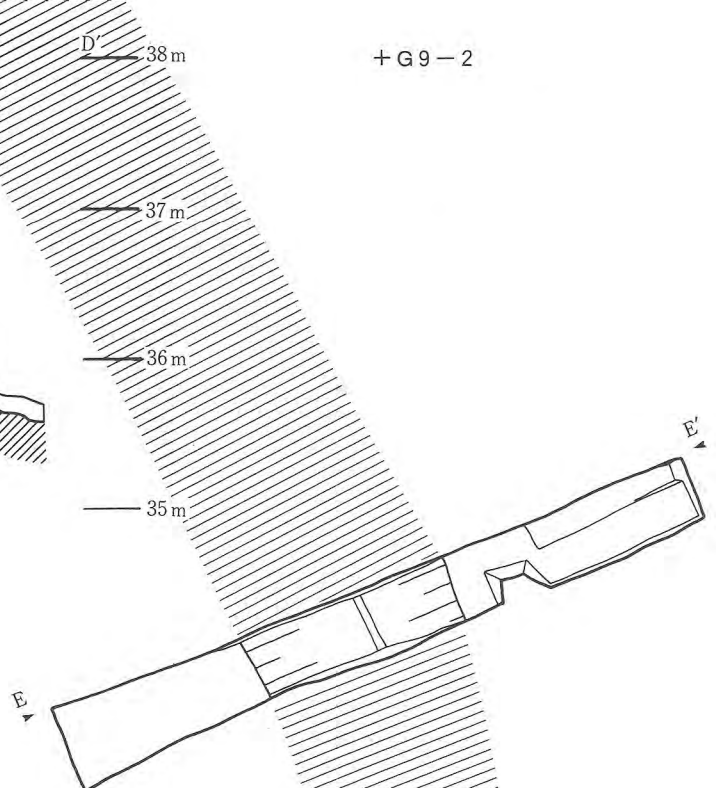
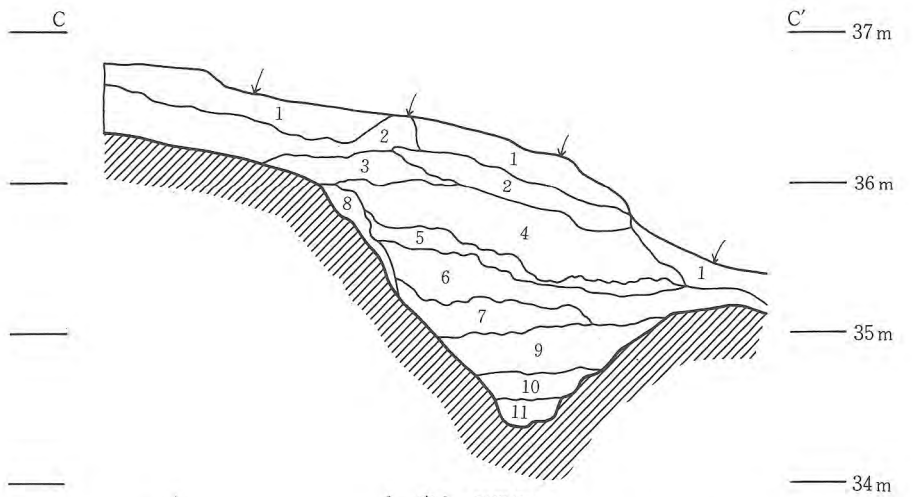
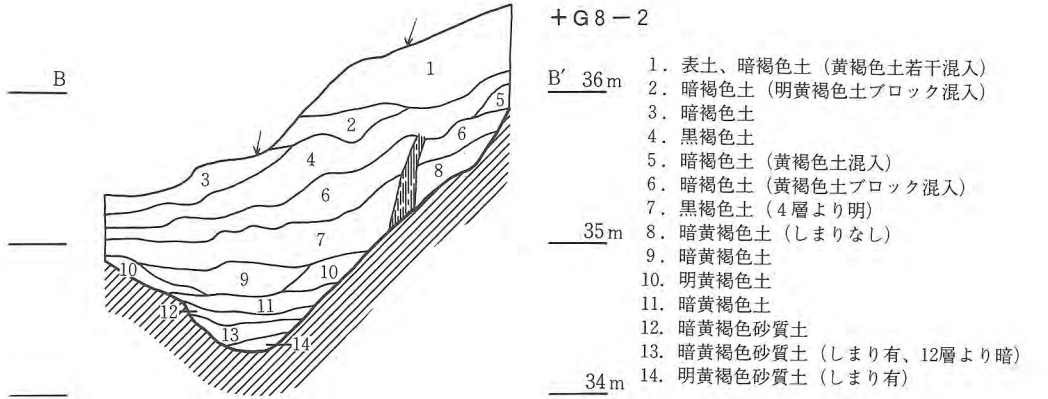
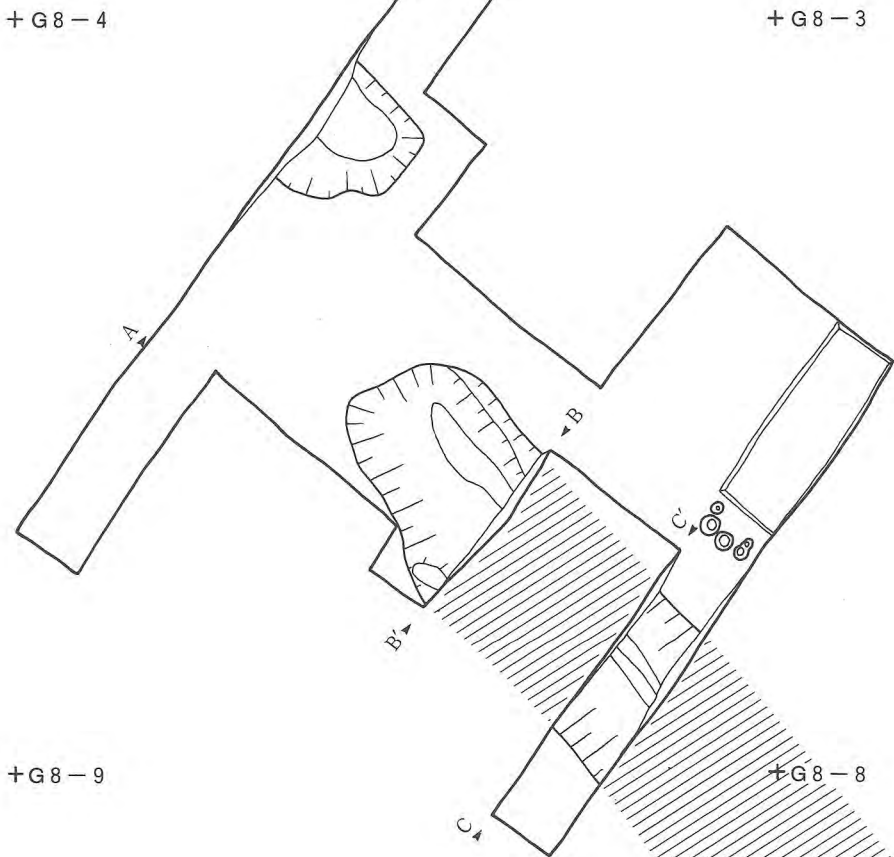
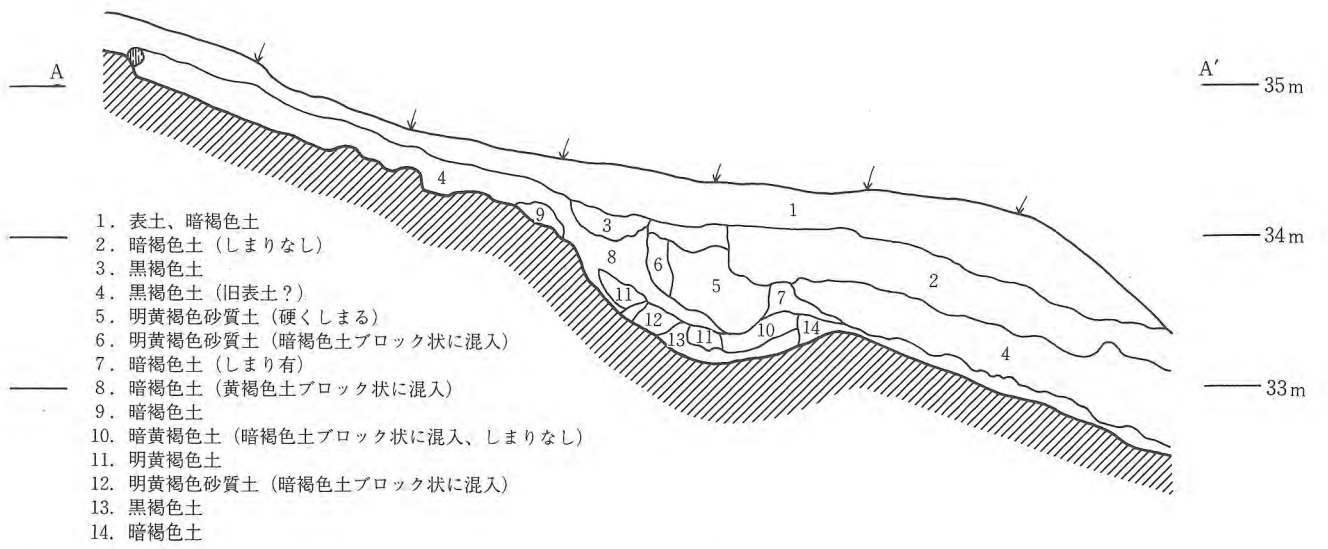
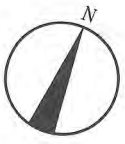
第3次調査によりG13-6・7グリッド付近で確認された環濠の延び、形態・規模を確かめるために、北側に順次トレンチを設定していった。その結果、G8-3、G8-7、G9-1・2、G10-1、G10-6、G11-1、G11-6・7、G12-1・2、G12-6・7グリッドで環濠が確認された。ただし、G10-6、G11-6・7グリッドでは確認面で遺構検出をただけで、遺構の掘り下げは行っていない。環濠のほかにはピット状の遺構が数基検出された。

#### 環濠 (第3～5図)

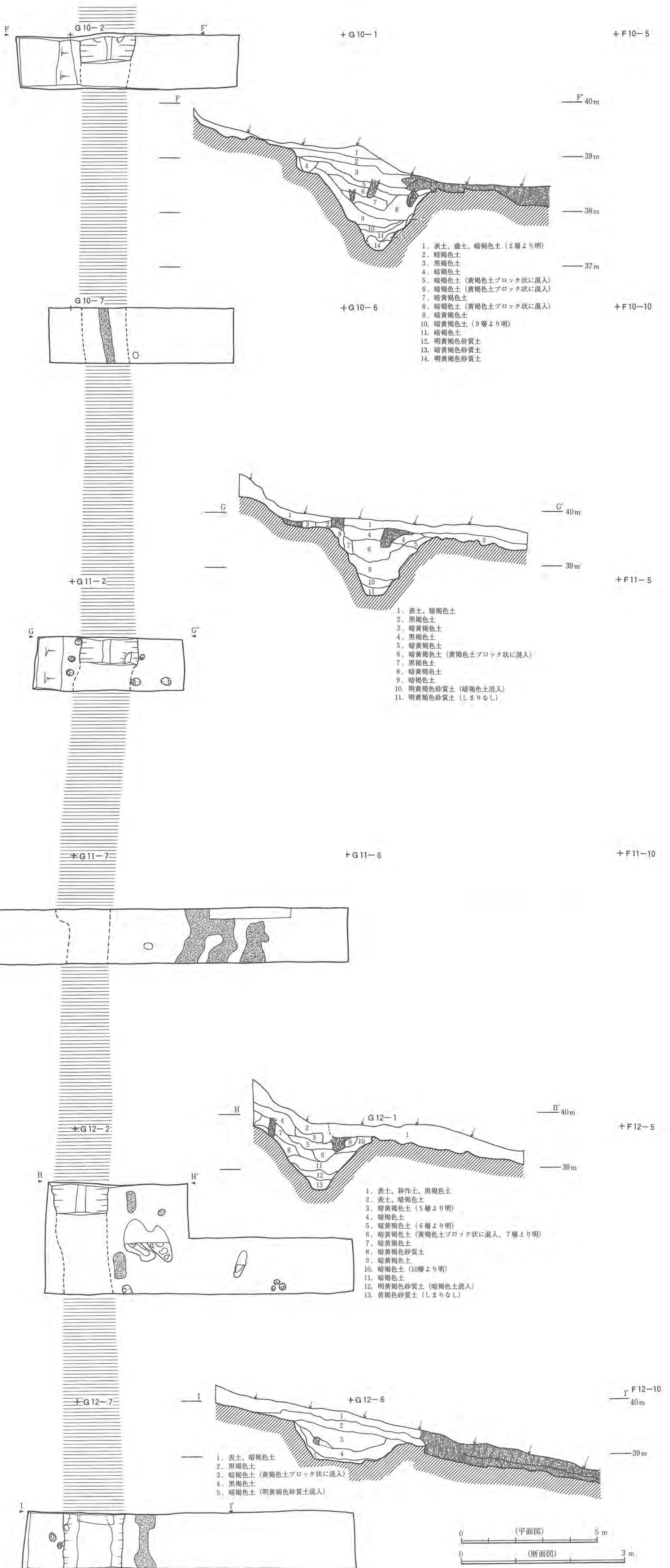
今回検出された環濠は、古津八幡山古墳の北東斜面に位置する。G10グリッドからG12グリッドまでは南南西から北北西方向に、標高40mの等高線に沿うようにほぼ直線的に造られている。その北側のG9-6グリッド付近で向きを北西方向に変えながら僅かに高度を下げ、G8-3グリッドでは標高約36mを測る。底面の高さも同様に、標高38.6mから34.3mと北側に行くにつれて低くなる。

G8-3、G12-6・7グリッドを除き、環濠の断面はV字形に近い底面の狭い逆梯形を呈し、上幅180～280cm、下幅30～50cm、深さは山側で110～170cm、谷側で80～110cmを測る。上幅をみると、カーブするG8-7、G9-1・2グリッド付近では、幅が280cmあり、ほかに比べて広がっている。





第4図 遺構全体図1



第5図 遺構全体図2

覆土の堆積状況は、底面から順に黄褐色砂質土・暗褐色土・黄褐色土混じり暗褐色土・黒褐色土という大略傾向がある。底面近くの黄褐色砂質土は同レベルの地山土に近似し、混入物をあまり含まない。環濠掘削後まもなく風水により埋没が始まったことを示しているものと思われる。黄褐色土混じり暗褐色土は、環濠排土の再堆積と考えられる。掘り上げた排土を土壘状に積み上げていたと推測されるが、環濠の山側か谷側かは判断できなかった。遺物は上層からの出土が多い。

G8-3グリッドではこの環濠の北端か、あるいは陸橋部に相当する部分が検出された。末端部は上面・底面ともに弧状を呈し、緩やかに立ち上がる。第4図ではこの環濠の北側に、これにつながるかのように図示されているが、土層の堆積状態がほかとは異なり、風倒木のようなものではないかと考えられる。この先にさらに2か所のトレンチを設定したが、環濠のつながりは確認できなかった。時間的制約と、民有地での確認調査ということもあり、今年度の調査は途中で断念せざるを得なかったため、環濠の末端とするには確証に欠ける。来年度以降の調査で明らかにしていきたいと考えている。

C12-6・7グリッド検出の環濠は、断面逆梯形を呈し、上幅220cm、下幅120cm、深さは山側で80cm、谷側で40cmと浅く、ほかとは大きく異なる。念のためにサブトレンチを入れて深掘りをしてみたが、底面は間違いなく地山であった。第3次調査でこの環濠の南端が確認されており、20m程しか離れておらず、通路とするには近すぎるように思われる。この間に発掘区を設定したかったが、既に公園整備されており、できなかったため、今後の課題としておきたい。

第3次調査で環濠の南端が、今回の調査では北端が確認された。この結果、検出された環濠の長さは約120mとなる。現況では、G10グリッドからG12グリッドにかけて、環濠の位置する場所の山側に大きな段切りがみられる。段切り自体は太平洋戦争前後の畑造成に伴うものとしても、環濠の位置と良く一致することから考えて、環濠の排土・土壘などの痕跡があったために、この位置に段切りを行った可能性が高いものと思われる。

## 2 遺物

平成5年度の確認調査では平箱6箱程の遺物が出土した。剥片と鉄滓が各1点あるほかは弥生土器である。

### 弥生土器 (第6図・第2表)

弥生土器には、北陸系の所謂法仏式系土器・東北系の所謂天王山式系土器・両者の折衷とも言える在地型土器の三者がある。口縁部破片ならば三者の弁別は比較的容易であるけれども、胴部破片の場合、縄文施文・沈線文などの要素から所謂天王山式土器を選出することはできても、ハケメ調整だけの胴部破片から三者を区別することは難しい。胎土・色調にも大きな違いは見られないように思われる。胎土に海面骨針が含まれた土器が多いが、何れの系統の土器にも含まれている。なお、本遺跡の天王山式土器には、交互刺突文や磨消縄文など天王山式の特徴となる要素が少なく、ハケメ調整された土器が多いという特徴があり、田中靖氏分類のB・C群が主体と考えられる。

出土状況は第3次調査区に近いG12グリッドで比較的多かったものの、それよりも北側の発掘区では多くはない。小片が多く、完形土器や一括出土はみられなかった。これは、遺物包含層が畑や植林などによる攪乱のため遺存状況が良好でなかったこと、保存を考えて遺構を完掘せず部分的な調査にとどめたことにもよるが、遺跡の中心から離れていることも一因と考えられる。土器の保存状態は全般に不良で、洗浄には細心の注意を払った。洗浄後、バインダー処理を施した。出土遺物を発掘区別に図示した。

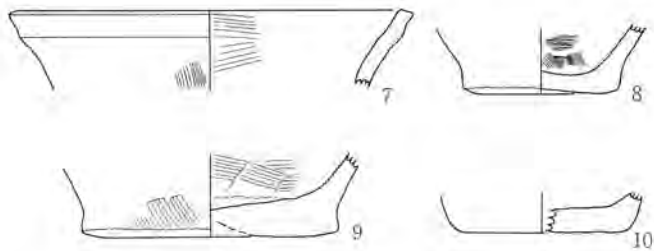
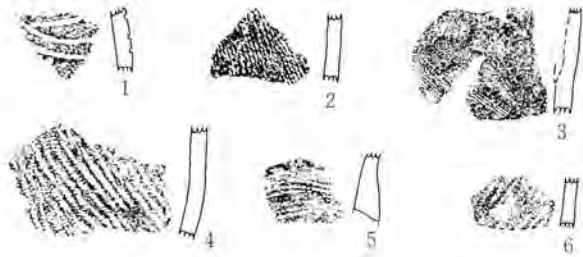
G8-2・3 (1~10) 1・2・4~6が東北系、7~10が北陸系である。1は縄文を地文としヘラにより重弧線文が描かれる。7・10は甕、9は大形の壺であろうか。1~3・8が環濠出土。

G8-7・8 (11~15) 11~14が東北系、15は北陸系か。11は縄文が施され、口縁端部には刻みが入る。12は細かいLR縄文が施された甕で、外面にはススが厚く付着する。13・14は同一個体。器壁が薄く、横走縄文が特徴的である。11~14が環濠出土。

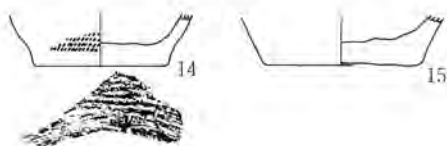
G10-1 (16) RL縄文が横走する東北系の土器である。



(G 8-2·3)



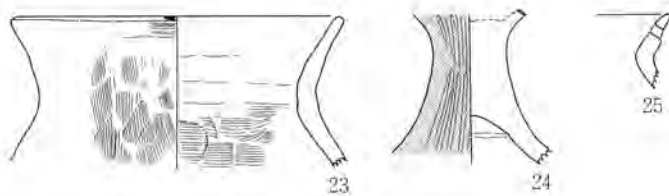
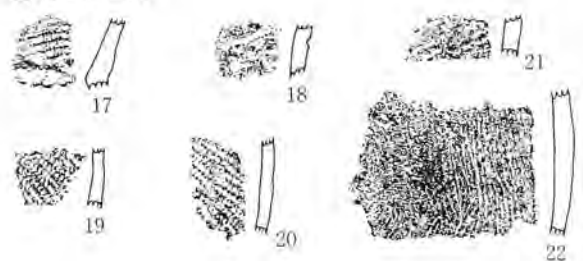
(G 8-7·8)



(G 10-1)



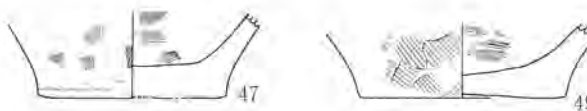
(G 11-1·6)



(G 12-1·2)



(G 12-6·7)



(F 13-3)



第6图 弥生土器

G11-1・6 (17~25) 17~21が東北系、24・25が北陸系である。19・20は同一個体で、本遺跡では比較的珍しいRL縄文が施文される。24は赤彩された高杯。25はヨコナデされた口縁部に焼成前の穿孔がある鉢。23は内外面ハケメ調整される甕で、口縁端部にもハケメ原体により面がつくられる。口縁部に本来あるべきヨコナデ調整を欠く在地の土器であろう。17~20・22~24が環濠出土。

G12-1・2 (26~35) 26・27・29~32が東北系、33・35が北陸系と思われる。27は内外面細かいハケメ調整された口縁部で、口縁端部は波状を呈する。29はゆるくくびれた頸部破片で、内外面ともあらいハケメで調整される。32はく字状に大きくくびれる甕。内外面はあらいハケメが横方向に施文される。口縁端部には同一原体で外面からキザミを施している。26~29・32~34が環濠出土。

第2表 弥生土器観察表

No.	出土地点	遺構・層位	部位	外面調整・施文	内面調整	胎土・色調	備 考
1	G8-2・3	環濠	胴部	LR、連弧文	ナデ	褐色	スス付着
2	G8-2・3	環濠	胴部	R	ナデ	褐色	スス付着
3	G8-2・3	環濠	胴部	ハケメ	ハケメ	黄褐色	海綿骨針含む
4	G8-3		胴部	LR	ミガキ	黄褐色	
5	G8-3		底部付近	LR	ミガキ	黄褐色	
6	G8-3		胴部	LR	ミガキ	褐色	
7	G8-3		口縁部	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ	黄褐内	
8	G8-3	環濠	底部	ナデ	ハケメ	黄褐色	海面骨針・石英・長石含む
9	G8-3		底部	ハケメ	ハケメ	黄褐色	石英・長石多く含む
10	G8-3		底部	不明	不明	黄褐色	焼成不良
11	G8-7・8	環濠	口縁部	LR、端部キザミ	ナデ	褐色	スス付着
12	G8-7・8	環濠	頸部	LR	ナデ	褐色	スス多量に付着、金雲母含む
13	G8-7・8	環濠	胴部	LR	ナデ	褐色	14と同一個体
14	G8-7・8	環濠	底部	LR	ナデ	褐色	13と同一個体
15	G8-7・8	環濠	底部	ナデ	ナデ	黄褐色	石英・長石多く含む
16	G10-1-1	環濠上層中層	胴部	RL	ナデ	褐色	
17	G11-1-6	環濠上層	口縁付近	LR	ミガキ	褐色	炭化物付着、海面骨針含む
18	G11-1-6	環濠上層	胴部	沈線	ナデ	黄褐色	焼成不良
19	G11-1-6	環濠中層	胴部	RL	ナデ	褐色	20と同一個体
20	G11-1-6	環濠中層	胴部	RL	ナデ	褐色	スス付着、19と同一個体
21	G11-6-6		胴部	LR	ナデ	褐色	
22	G11-1-6	環濠上層	胴部	あらいハケメ	ナデ	黄褐色	海面骨針・石英・長石含む
23	G11-1-6	環濠中層	口縁部	ハケメ	ハケメ	褐色	スス付着、海面骨針含む
24	G11-1-6	環濠上層	脚部	ミガキ、赤彩	ナデ	黄褐色	
25	G11-1-6		口縁部	ハケメ、ナデ	ナデ	黄褐色	焼成前の穿孔あり
26	G12-2-10	環濠上層	胴部	LR	ナデ	黒褐色	スス付着
27	G12-2-10	環濠中層	口縁部	ハケメ、ナデ	ハケメ	褐色	
28	G12-2-10	環濠中層	胴部	あらいハケメ	ナデ	燈色	石英・長石含む
29	G12-2-10	環濠中層	頸部	あらいハケメ	あらいハケメ	黄褐色	海面骨針含む
30	G12-2-10		胴部		ナデ	褐色	石英・長石含む
31	G12-1-11		胴部	L	ナデ	黄褐色	
32	G12-2-10	環濠下層	口縁部	ハケメ、端部キザミ	ハケメ	燈色	海面骨針含む
33	G12-2-10	環濠下層	口縁部	不明	ナデ	黄褐色	
34	G12-2-10	環濠下層	底部	ミガキ?	ナデ	赤褐色	
35	G12-1-11		底部	ナデ	ハケメ	黄褐色	
36	G12-6-12		口縁部	ハケメ、端部キザミ	ハケメ	燈色	海面骨針含む
37	G12-6-11	環濠上層	胴部	連弧文	ナデ	淡黄色	
38	G12-6-11	環濠上層	胴部	LR、沈線	ナデ	黄褐色	
39	G12-6-11	環濠上層	胴部	LR	ナデ	淡黄色	スス付着、40と同一個体
40	G12-6-11	環濠上層	胴部	LR	ナデ	淡黄色	スス付着、39と同一個体
41	G12-6-11	環濠上層	胴部	RL	ハケメ	淡黄色	スス付着
42	G12-6-11	環濠上層	胴部	縄文	ナデ	暗褐色	スス付着
43	G12-6-11	環濠上層	胴部	LR	ナデ	黄褐色	
44	G12-6-11		底部	LR	ナデ	黄褐色	
45	G12-6-11		口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	
46	G12-6-11	環濠上層	底部	ナデ	ナデ	褐色	石英含む
47	G12-6-11	環濠上層	底部	ハケメ	ハケメ	燈色	底部に圧痕
48	G12-6-11	環濠上層	底部	ハケメ	ハケメ	燈色	海面骨針含む
49	G12-7-15		底部	ハケメ	ハケメ	黄褐色	海面骨針含む
50	F13-3-25		胴部	ハケメ	ハケメ	黄褐色	海面骨針含む

G 12-6・7 (36-49) 36-44が東北系、45・46が北陸系と思われる。36は内外面ハケメ調整された口縁部で、端部に外側からキザミが施される。37は連弧文が沈線で描かれる。38も縄文地の上に沈線で文様が描かれるがモチーフは不明。39・40は同一個体で、外面にはLR縄文が施文される。内面には接合痕が明瞭に残る。41は外面縄文、内面ハケメ調整される。42は外面に縄文が施文されるが原体不明。45は甕の口縁部で、内外面ヨコナデ調整される。47-49はハケメ調整された底部であるが、何れかわからない。37-43・46-48が環濠出土。

F 13-3 (50) 内外面ハケメ調整された胴部破片。海面骨針を含む。

剥片 (図版8)

G 11-6-8 グリッド出土。右側縁に微少な刃毀れがみられる剥片。二次加工痕等は認められない。石材は頁岩である。

鉄滓 (図版8)

G 9-1・2 グリッド出土。所謂流動滓である。側面は破面。上下面に自然面を残す。箱形炉から排出された滓であろう。

## V ま と め

### 1 第1次調査から第8次調査の成果

1. 八幡山遺跡は、新潟県新津市大字古津字八幡腰・戸畑・鳥打場・初越ほかに所在する。新潟平野、遠くは弥彦山・角田山を臨む丘陵上に立地し、標高54.5m、沖積地からの比高約50mに立地する。信濃川・阿賀野川の二大河川が最も近接する位置にあり、北陸-越後-会津ルートの要所と考えられている。
2. 弥生時代後期後半に造られた高地性環濠集落で、少なくとも二重の環濠が集落を巡っている。
3. 検出された遺構は、北地区で環濠3か所(2条)・竪穴住居址16基・炉址3基・前方後方形の墳墓1基、南地区で環濠1条・竪穴住居址11基、北地区・南地区間の痩せ尾根で環濠1条である。
4. 集落の存続時期は、新潟シンボ編年の1-4期で、主体は2・3期である。環濠出土資料も2・3期を主体とするが、環濠出土資料の分析が未着手の状態なので、すべての環濠が同時に掘られ、同時に機能しなくなったという確証はない。
5. 北地区の環濠は、3か所で検出されており、少なくとも二重に巡るものと考えられる。規模は上幅180-280cm、深度140-180cmで、断面V字形に近い逆梯形を呈する。北地区・南地区間の痩せ尾根部分で検出された環濠は、上幅350cm、深度180cmとほかに比べてひとまわり規模が大きく、重要な位置と認識されていたことが推測される。南地区の環濠は、尾根の中央部付近にあり、上幅250cm、深度160cm、長さ16mを測る。平面形は、中央部付近でわずかに東側に張り出す弧状を呈し、東方を集落の外側と意識していたと推測される。断面形は同じ。環濠の両端は切れていたが、北側・南側ともに浅い谷が入り込むために尾根を東西に分断するためには十分な機能を有していたものと考えられる。
6. 竪穴住居址は、平面形は一辺5m前後の隅丸長方形を呈するものが一般的である。支柱穴4本・中央の炉址・壁際中央の貯蔵穴を基本構造とする。なかには壁溝や山側に弧状に掘られた排水溝を伴うものがある。床面は谷側の遺存状態があまり良くないが、基本的には貼床を行っていたものと考えている。
7. 竪穴住居址の上限は第3次調査のN8号住居址(1期)、下限は第7次調査のC区3号住居址で(4期)である。N8号住居址は北地区の外側の環濠30m下方、C区3号住居址は南地区中央の環濠の120m東側にあり、両者とも、現在確認されている環濠の外側に位置する。これらの時期に環濠が機能していたか不明である。



8. 集落の北西端には、集落廃絶後古津八幡山古墳が築かれている。墳丘長約60mの二段築成の造り出し付円墳と考えられており、所属時期は新潟シンボ編年8・9期頃と推定されている。
9. 前方後方形の墳墓は、丘陵頂部付近に築かれている。規模は全長13m・後方部長軸9m・短軸7.5mで、赤塚分類のB2型にあたる。所属時期は新潟シンボ編年5・6期と推定されている。
10. 弥生土器には、東北系の所謂天王山式系土器・北陸系の所謂法仏式系土器があり、両者の比率は均衡する。天王山式系土器は、田中靖氏分類のC群が主体で、ハケメ調整された土器が多い。
11. 40数点の石鏃・磨製石斧・扁平片石斧、勾玉・管玉などの玉類、玉造の原材料と推定される緑色凝灰岩製の剥片・石核が出土している。大形の石鏃の出土は、防禦的性格を有する集落であることの傍証資料とされている。なおアメリカ式石鏃は3点しかなく、石鏃全体に占める割合は低い。
12. 丘陵下の沖積地には、同時期の集落は発見されておらず、親村に対する見張り台・逃げ城的な性格ではないと考えられる。集落規模から見ても、いくつかの集落が集まって丘陵上に住んだ拠点集落と考えられる。
13. 平安時代の須恵器・土師器とともに鉄滓が出土している。金津丘陵南半の製鉄遺跡群と近いことからみて、鉄生産に関連するものである。

## 2 第9次調査の成果と問題点

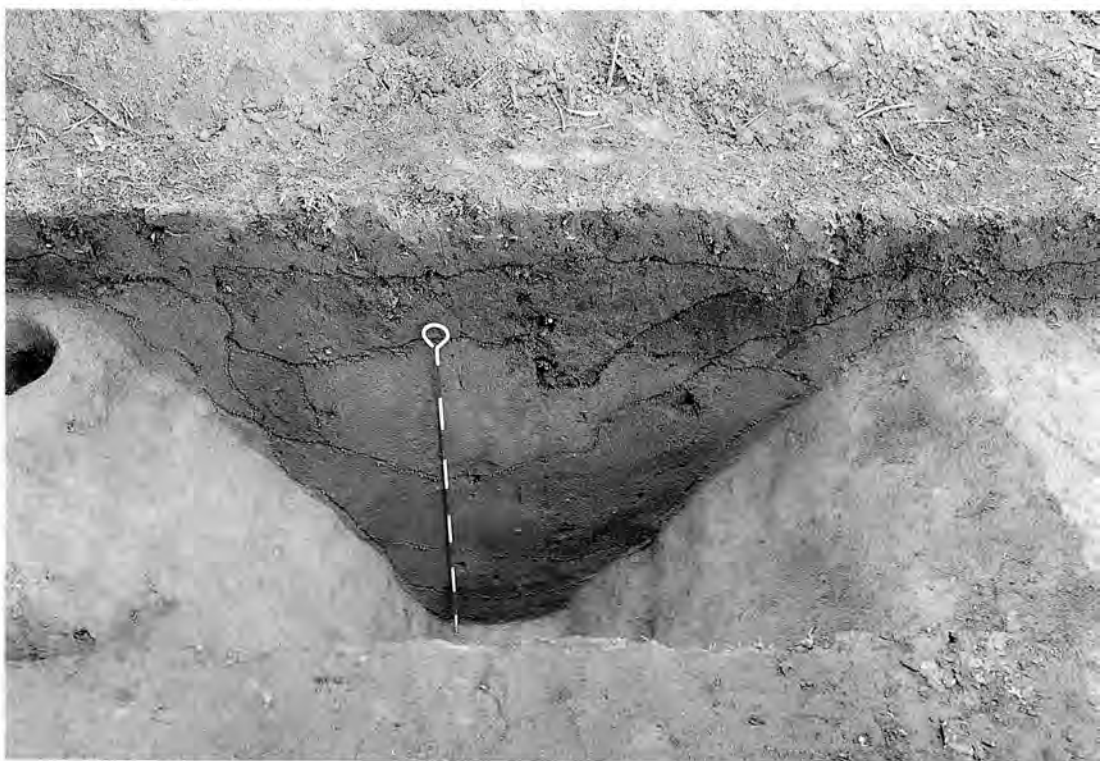
1. 第3次調査で検出されていた2条の環濠のうち、外側にある環濠が、古津八幡山古墳の東縁・北東縁を捲くようにさらに100m以上も延びていることが確認された。環濠の断面はV字形に近い逆梯形を呈し、規模は、上幅180~280cm、下幅30~50cm、深度80~170cmを測る。第3次調査では環濠の南端が、今回の調査では北端が検出され、少なくとも120m程の長さにならわって掘られている。この環濠は、南方へ延びて第3次調査時にG17・18グリッドで検出された環濠につながる可能性があり、そうすると、200m以上の長さとなる。
2. 環濠の北端よりも先は未調査のため、本当にここで途切れるのか、あるいは陸橋状となるのかはわからない。
3. 環濠の位置する山側に大きな段切りがみられ、環濠の位置と良く一致する。環濠の排土・土塁などの痕跡があったために、この位置に段切りを行った可能性がある。あるいは、環濠と直接関係ないにしても、環濠を意識して築かれた古墳の盛土などの痕跡によって、段切りが行われた可能性がある。
4. 環濠の広がりによって、集落の面積は北地区・南地区を合わせ48,000m<sup>2</sup>以上になり、東日本有数の高地性集落となる。これは今後の調査によってさらに拡大する可能性がある。
5. 出土遺物には、北陸系の所謂法仏式土器・東北系の所謂天王式系土器・折衷型の在土器の三系統がある。三系統の土器の比率を見ると、北陸系土器がほかに比べ若干少ないように見受けられる。所謂天王山式系土器には、交互刺突文や磨消縄文が少なくハケメ調整された土器が多い。
6. 環濠出土の遺物は、新潟シンボ編年の2・3期頃と考えられる。
7. 畑・植林などによる攪乱のため、遺跡の北東側の広がりを確かめることができなかった。北東方向には居住域に適した緩斜面が広がり、細片ながら土器の散布が見られることから、遺跡が続いているものと予測される。北東方向は、E11からE13杭の幅40m程の尾根を挟んで、埋葬地遺跡でも第1次調査で弥生時代後期後半の遺物が出土しており、八幡山遺跡の北東方向への遺跡の広がりを掴む必要があろう。

## 引用・参考文献

- 甘粕 健・古川知明<sup>ほか</sup> 1981 『大沢遺跡』 巻町・湯東村教育委員会
- 甘粕 健・川村浩司<sup>ほか</sup> 1992 『古津八幡山古墳Ⅰ』 新津市教育委員会
- 甘粕 健・小野 明・川村浩司<sup>ほか</sup> 1993 『越後山谷古墳』 巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室
- 石川日出志 1990 『天王山式土器編年研究の問題点』『北越考古学』第3号
- 伊与部倫夫 1989 『新潟県八幡山遺跡』『探訪弥生の遺跡』畿内・東日本編 有斐閣
- 上原甲子郎・磯崎正彦 1968 「北陸地方Ⅱ」『弥生式土器集成 本編2』東京堂出版
- 大木直枝・中村五郎 1970 「山草荷2式土器について」『信濃』第22巻第9号
- 川上貞雄 1990 「新潟県新津市八幡山遺跡」『日本考古学年報』41(1988年度版) 日本考古学協会
- 川上貞雄 1992 『川口甲遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 川上貞雄・木村宗文・鈴木郁夫<sup>ほか</sup> 1989 『新津市史』資料編第1巻 原始・古代・中世 新津市史編さん委員会
- 川村浩司 1990 「倭国大乱と越後」『新潟史学会例会会報』第12号
- 北村 亮 1991 「上浦遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査だより』No.7
- 小林 存 1952 『新津市誌』新津市役所
- 駒形敏朗<sup>ほか</sup> 1987 『横山遺跡』長岡市教育委員会
- 坂井秀弥 1985 「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史研究』17
- 坂井秀弥 1989 「新潟県新津市八幡山出土の古式土師器」『新潟考古学談話会会報』第4号
- 坂井秀弥 1990 「新潟県の円墳」『古代学研究』第123号
- 坂井秀弥<sup>ほか</sup> 1989 『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会
- 関 雅之 1972 『滝ノ前遺跡』村上市教育委員会
- 関 雅之 1979 「新津市における考古遺跡と遺物について(1)」『新津郷土史』第3号
- 関 雅之 1979 「新津市における考古遺跡と遺物について(2)」『新津郷土史』第6号
- 田中 靖 1988 「北陸地方における天王山式系土器について」『新潟考古学談話会会報』第2号
- 田中 靖 1990 「北陸における天王山式期の現状と課題」『「天王山式期をめぐって」の検討会記録集』
- 坪井清足 1953 「福島県天王山遺跡の弥生式土器—東日本弥生式文化の性格—」『史林』第36巻第1号
- 中川成夫・倉田芳郎 1956 「新津田家七本松須恵器窯址発掘調査報告」『越佐研究』第11号
- 中村五郎 1976 「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』
- 中村五郎 1983 「東北中・南部と新潟」『三世紀の考古学』下巻 学生社
- 新潟県編 1986 『新潟県史』通史編1 原始・古代
- 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1992 「遺跡の発掘調査(平成4年度)」『埋文にいがた』No.2
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会編集 1993 『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
- 渡邊朋和 1990 「居村C・D・E遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査だより』No.6
- 渡邊朋和 1990 「新津市金津丘陵製鉄遺跡群」『新潟県考古学会第2回大会研究発表会—発表要旨—』
- 渡邊朋和 1991 『長沼遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1992 『上浦遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1993 「上浦B遺跡」『埋文にいがた』No.2



G12-6・7 環濠  
(南東から)



G11-1・2 環濠土層断面  
(南から)



G8-3 環濠土層断面  
(北西から)





古津八幡山古墳

八幡山遺跡





遺跡近景 (南から)



遺跡近景 (南東から)



発掘調査風景



発掘調査風景



G12-6・7 (東から)



G12-6・7 環濠土層断面 (南から)



G12-1・2 (東から)



G12-1・2 環濠検出状況 (西から)



G12-1・2 環濠土層断面 (南から)



G11-6・7 遺構検出状況 (東から)



G11-1・2 環濠検出状況 (東から)



G11-1・2 環濠土層断面 (南から)



G11-1・2 環濠底面 (南東から)



G10-6・7 環濠検出状況 (東から)



G10-1・2 環濠検出状況 (東から)



G10-1・2 環濠土層断面 (南から)





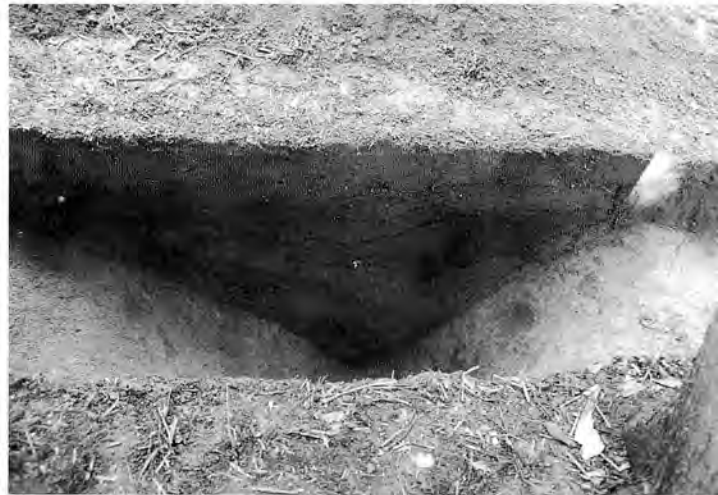
G9-1・2 環濠検出状況 (東から)



G9-1・2 環濠土層断面 (南西から)



G8-7・8 環濠検出状況 (北東から)



G8-7・8 環濠土層断面 (南西から)



G8-2・3・8 環濠検出状況 (南西から)



G8-3 風倒木? 検出状況 (西から)



G8-3 風倒木? 土層断面 (南西から)





G8-2・3・8 環濠検出状況 (北東から)



G8-2・3・8 環濠検出状況 (南西から)



G8-2・3・8 環濠検出状況 (北から)



G8-3 環濠検出状況 (北西から)



G8-2・3・8 環濠検出状況 (東から)



G8-2・3・8 環濠土層断面 (南西から)



G8-2・3 土層断面 (北西から)



G8-3 環濠土層断面 (北西から)



F 9 - 10 (東から)



F 10 - 5 (東から)



F 12 - 4 (東から)



F 12 - 9 (東から)



F 12 - 7 (東から)



F 13 - 2 ・ 3 (東から)

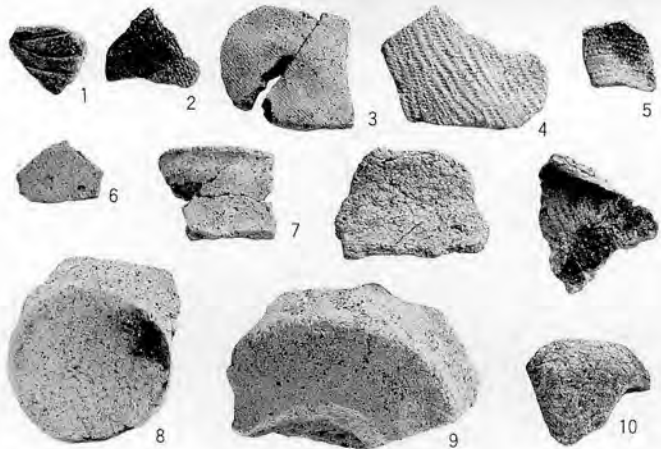


F 13 - 2 ・ 3 (西から)

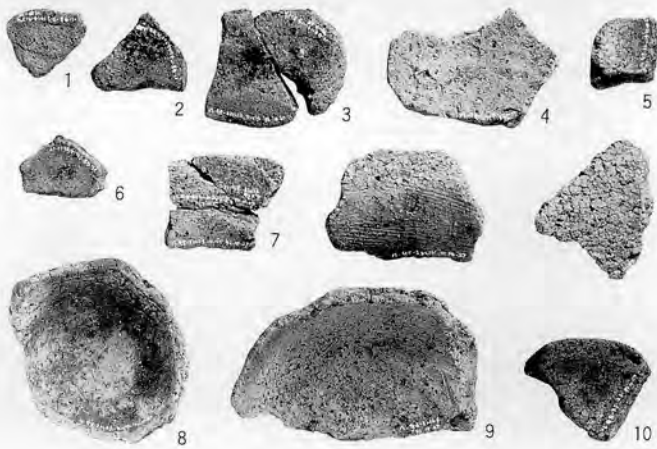


F 13 - 2 ・ 3 土層断面 (南から)

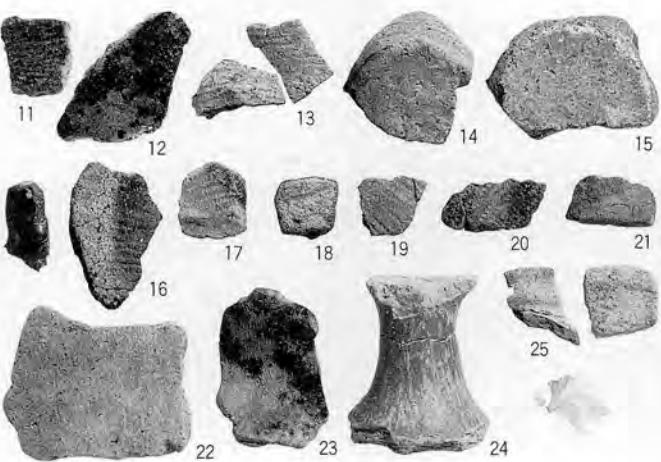




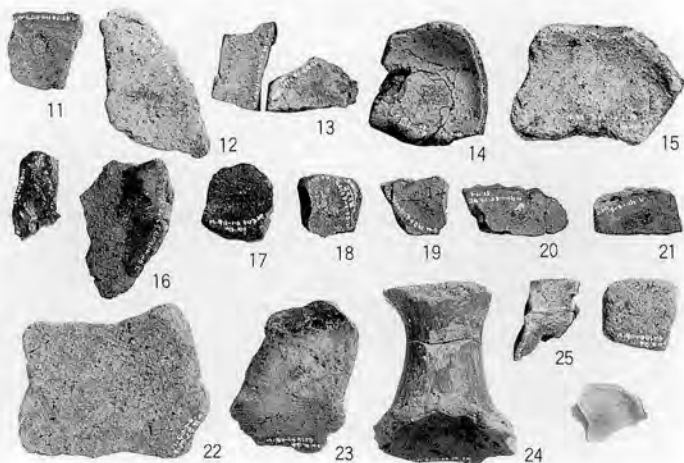
弥生土器 (G 8-2・3)



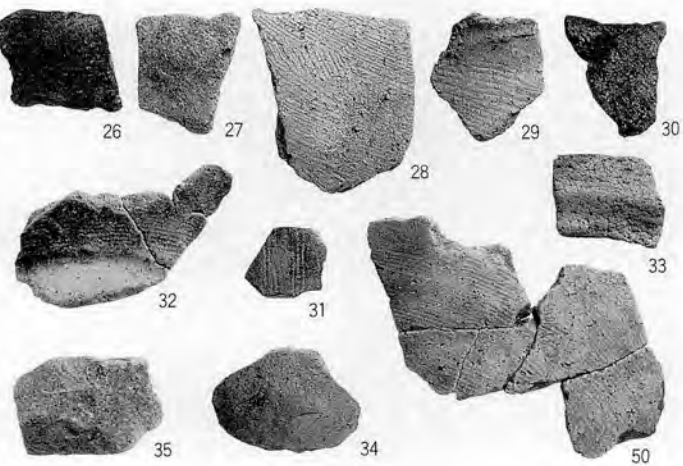
同内面



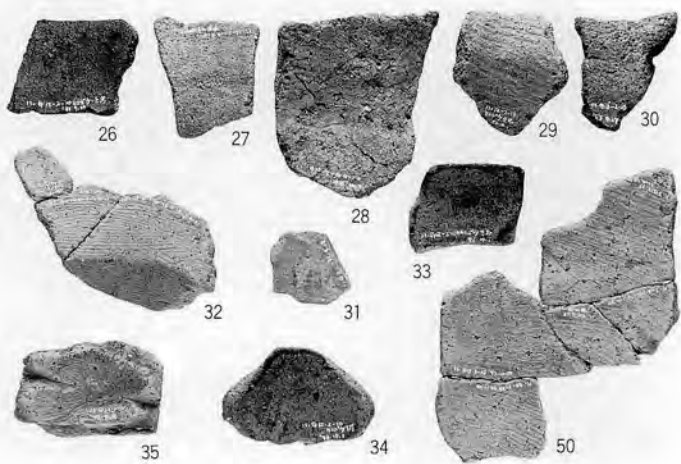
弥生土器・鉄滓・剥片 (G 8-7・8、G 10-1、G 11-1・6)



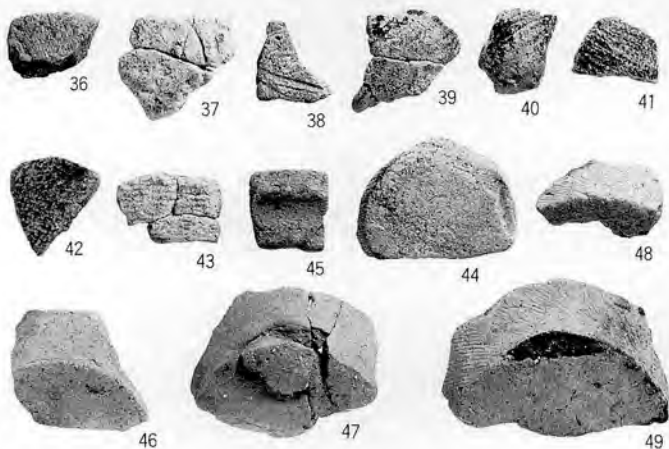
同内面



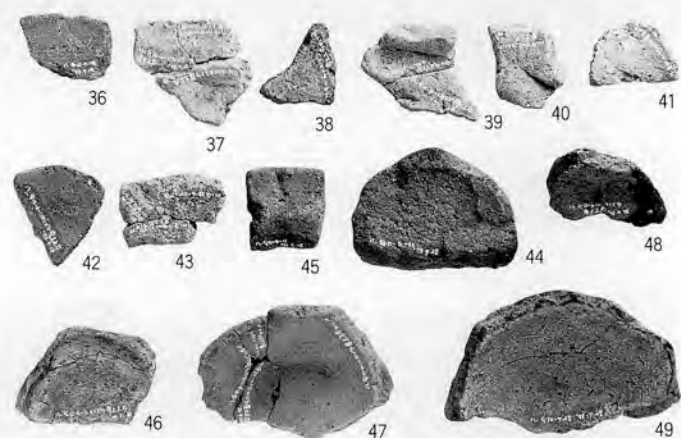
弥生土器 (G 12-1・2、F 13-3)



同内面



弥生土器 (G 12-6・7)



同内面

報告書抄録

ふりがな	はらまみやまいせきはつかつちようさほうこくしよ							
書名	八幡山遺跡発掘調査報告書							
副書名	平成5年度範囲確認調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新津市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	渡邊朋和							
編集機関	新津市教育委員会							
所在地	〒956 新潟県新津市程島2009番地 TEL 0250-22-9667							
発行年月日	西暦 1994年3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はらまみやまいせきはつちようさほうこくしよ 八幡山遺跡	にいがたけん にいつし おおあざ あらつ あざ 新潟県新津市大字古津字 はらまみやまいせきはつちようさほうこくしよ 八幡越	207	50	37度 45分 44秒	139度 7分 3秒	19930921～ 19931105	372	公園整備のため
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
八幡山遺跡	高地性 環濠集落	弥生時代後期	環濠・ピット	弥生土器				

## 八幡山遺跡発掘調査報告書

—— 平成5年度範囲確認調査 ——

1994年3月30日発行

発行 新津市教育委員会  
新潟県新津市程島2009番地  
〒956 TEL (0250)22-9667

印刷 長谷川印刷  
新潟市小針1丁目11-8  
〒950-21 TEL (025)223-0321